

# 新春所感

## —おみくじの御利益を信じつつ—



日野病院名誉病院長 玉井 嗣彦

新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましては、晴れ晴れと希望に満ちた新年をお迎えになられたこととお慶び申し上げます。

私は鳥取大学を定年退官後、日野路の日野病院に名誉病院長として赴任してから、早くも12度目の新春を迎えました。

私は1月2日生まれですので、毎年誕生日に初詣に参りますが、今年も昨年と同様、米子市内の加茂神社天満宮に出かけました。

幸い今年も「大吉」のおみくじを引きあてましたので、ご披露申し上げたいと思います。

「全力疾走で大きく成長。かけられる期待は大きく荷は重いが、この緊張感こそ成長に必要。力を惜しむことなく、最大限に長所を発揮してさらなる飛躍を目指せ」と。

項目別には、・仕事（やりがいを実感できる）、・金運（バランスのとれた使い方を）、・愛情（ゆっくりと育め）、・家庭（自己中心的な態度は厳禁）、・対人（よきライバルが出現する）、・勝負（油断大敵）、・健康（深酒に注意）、・趣味（インターネットに有益情報）、・買い物（思い切って購入を）とありました。おみくじの御利益を信じつつ、このおみくじの内容は皆様にそっくり差し上げたいと思います。

昨年は数え年77歳の喜寿を迎え、鳥取県医師会を筆頭に各方面から身に余る「喜寿のお祝い」を賜わり感激いたしました。満77歳を迎え、人生100歳時代も夢ではない今日、これからも夢を抱いて、「傘寿、米寿のお祝い」が載けるよう努力して参りたいと思いますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。

サミュエル・ウルマンは、「年を重ねるだけでは人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。希望ある限り若く、失望とともに老い朽ちる」と述べています。

寿命は長寿遺伝子によって左右されるとも言われていますので、いつ朽ち果てるのか誰にもわかりませんが、生きている間は自ら老いたくないものです。

「老いは忘るべし また老いは忘るべからず」とは江戸時代の俳文学者横井也右の随筆集「鶉衣（うずらごろも）」に書かれている名文句ですが、「いくら年をとって老人になっても、死ぬまで何か仕事を持つことは大事だ」ともよく言われています。

「一病息災」どころか「多病息災」の時代、日常沢山の患者様を拝見し、健康長寿を目指すのは大変だとは思いますが、人生、花の散らぬ間です。幸い医療人である我々は、医療活動に従事する機会を持っています。

「生涯現役」のつもりで、お互い元気で地域医療に貢献するよう頑張りたいものです。

今年もどうかよろしくお願い申し上げます。